

日本語学校終了後に生かせる口頭発表技術の評価項目の作成

発表者：岩瀬理美・豊泉麻衣子・橋本洋子（ラボ日本語教育研修所）

1. はじめに

日本語学校終了後、学習者は、日本の大学、会社、地域社会の一員となり、自分とは異なる背景・知識を持つ人々に対し、自分の思いや知識を話して伝えることが必要とされる。そこで、学内で「普段1対1で行うコミュニケーションと同じような『話し言葉』を基本に人前で話す」（蔭山，2011）「パブリックスピーキング」という考え方を取り入れ、「“話す”特別授業」とその大会を行った。しかし、「パブリックスピーキング」の定義があいまいであり、その評価項目にも疑問が残った。その反省から、「パブリックスピーキング」の定義を明確にし、口頭発表の技術を適切に評価する評価項目の作成を試みた。

2. パブリックスピーキングの先行研究

井上・金子（2000）では、パブリックスピーキングの能力を「改まった場で自分の考えや思いを聞き手に的確に伝える能力、つまり話し言葉による伝達能力」と定義している。また、その際に使用する言葉について、「社会人として、やや改まった場面で、どんな人ともコミュニケーションを交わせる」言葉を使う必要があると述べている。中西（1991）では、パブリックスピーキングを「一人の話し手がある特定の話題についてまとまりのある内容を複数の聴衆に向かって話をする表現活動」と定義している。

また、野村（2004）は「スピーチを通してメッセージを相手に伝えるという言語行為には当然、目的が存在する」としている。その目的を「説得を目的とした Persuasive Speech、有益な情報を提供しようとする Informative Speech、聴衆を楽しませることを目的とした Entertaining Speech、行動を促そうとする Motivational Speech などに大きく分類でき複数の目的を同時に達成することもある」と述べている。

3. 「話す」特別授業の実践報告

3.1. 概要

学習者がパブリックスピーキングの力を身につけられるように、「話す」特別授業を行った。授業では、スピーチとプレゼンテーションを扱い、それぞれの学習者に目的や希望に応じて、どちらかの部門を選択してもらった。クラスは、レベルに関係なく編成した。

3.2. 実施

本稿では、スピーチを扱ったクラスの実施内容を報告する。スピーチクラスは、中級中期～上級後期（学習時間 600～1600 時間程度）の学習者を対象に 90 分×4 回（週 1 回）、

実施した。クラスAは、韓国人男性4名・韓国人女性1名、クラスBは、韓国人男性4名・韓国人女性1名・ベトナム人女性2名で行った。

クラスAは、学習者が話したい内容をアウトラインにし、それをもとに教師の前で話しながら内容・構成を修正してスピーチを完成させていった。一方、クラスBは、まず学習者がスピーチ原稿を作成し、その後、クラスメイトの前でスピーチを繰り返し、内容修正をしていった。その指導法は、教師間で統一したわけではない。

4. 校内スピーチ大会の実践報告

4.1. 概要

校内スピーチ大会を「“話す” 特別授業」の集大成と位置付けて実施した。まず、スピーチ・プレゼンテーションの部門ごとに予選をし、本選に出場する優秀者を選出した。本選では部門に関係なく、教師や学習者が一番良いと思うものに投票し、総合優勝を決定した。

4.2. 評価項目

校内スピーチ大会で使用した評価項目は、表1の通りである。

各項目は、5点満点で評価をつけた。⑤の「本人の目的との合致」は、学習者にどんな目的を持ってスピーチを行うかを事前に調査し、評価者はその調査結果を見て、その通りに感じたかを評価した。

表1 スピーチの評価項目

話し方	① 発音
	② イントネーション
	③ 音の明瞭さ
	④ スピード
内容	⑤ 本人の目的との合致
	⑥ 興味が持てる
構成	⑦ 必要な構成要素を含んでいるか
	⑧ 構成要素の関係性（結束性、一貫性）
言語	⑨ 文法・語彙・表現の正確さ
	⑩ 文法・語彙・表現の適切さ

4.3. 結果

表1の評価項目で実施したところ、評価が妥当でないと感じるものがあった。聞き終わった後の印象が良かったが、点数が低かったものや、聞いても心が動かされなかったが、構成や文法などの点数が高かったため、総合評価が高くなってしまったスピーチなどである。

5. 考察

校内スピーチ大会を実施してみたものの、表1の評価項目では、妥当な評価が得られなかった。それは、パブリックスピーキングの定義があいまいであったために、教師間、教師と学習者間とでパブリックスピーキングの共通認識ができていなかったこと、パブリックスピーキングを取り入れたが、それを適切に測れる評価項目ではなかったことが原因だと考えられる。

そこで、パブリックスピーキングを再定義し、日本語学校終了後に学習者が遭遇する「話

す」場面を具体的に想定した上で、必要な技術を測る評価項目を作成する必要があると感じた。

5.1. 「話す」特別授業」におけるパブリックスピーキングの再定義

先行研究をふまえ、本稿ではパブリックスピーキングを「改まった場で、決められた時間内に、ある程度まとまった内容を、目的を持って話すこと。加えて、その目的を達成するために、聞き手に合わせて話し方や内容を調整して話すこと」と再定義する。

「話す」特別授業」では、「目的を持って話す」、「聞き手の反応を見ながら話す」、「聞き手に話の内容を理解してもらうために、構成や内容を工夫する」ことを目標とする。

5.2. 日本語学校終了後に遭遇する「話す」場面の想定

学習者は、日本語学校終了後、職場や大学などで、自己紹介、面接、報告、プレゼンテーションをする機会がある。聞き手や伝える内容は場面によって異なるが、すべてにおいて必要な「話す」技術は以下の3点であると考える。

- ① 話し手が伝えたい目的を自分の中で明確にした上で、その目的に合わせて内容、構成、話し方を変える。
- ② その場にいる聞き手に自分の伝えたいことを的確に伝えるために、聞き手にあわせて内容、構成、話し方を変える。聞き手を意識して準備をするだけでなく、話している最中も、聞き手の反応をよく見て臨機応変に内容、構成、話し方を変えていく。
- ③ 決められた時間内に自分の言いたいことをまとめる。

以上の3点が出来ないと、言いたいことが伝わらず、聞き手に何かを感じさせることもできない。また、聞き手を必要以上に疲れさせ、聞き手に不満を抱かせてしまう。その結果、話し手は目的を達成できなくなる。話し手が目的を達成するためには、聞き手にいかに親切的な話し手になれるかが重要である。

5.2. パブリックスピーキングの評価項目

日本語学校終了後に遭遇する「話す」場面では、聞き手は構成や文法などの細かい部分よりも、話を聞き終わった後の印象を重視する。

また、話し手が目的を達成できたかどうかは、聞き手がそのスピーチを理解するのみにとどまらず、その後、聞き手がどのように感じたかによって決まる。行動を促すことを目的としたスピーチであれば、聞き手が話し手の言いたいことを理解し、さらに「～しよう」という気持ちを起こさなければ、話し手の目的が達成できたとは言えない。

そのため、今回作成した評価項目は、発音や内容、構成などを細分化して評価せず、スピーチを聞いた印象と話し手の目的が達成されたかどうかによって、話す技術を測るものとした。

1) 話題に興味を持てたか。

何度も聞いたことがある話や、聞き手に身近ではない話だと聞き手は興味を持てないため、積極的に聞こうとは思えない。

2) 聞いていて疲れなかったか。

発音があまりにも聞きとりにくかったり、話すスピードが速すぎたりすると、それが話を理解する妨げとなる。その場合、聞き手は話し手が言おうとしていることを推測、修正しなければならないが、それは聞き手にとっては疲れる作業であり、負担となる。

3) 聞いている時に不満が出てこなかったか。

説明や例が不足している場合や、例と言いたいこととのつながりがわかりにくい場合、話の内容を正確に理解することが難しくなる。このような話を聞くと、聞き手は「もっと詳しく説明してほしい」「話の要点がつかめない」などの不満を抱く。

4) 聞いた結果、どう思ったか。(=話し手の目的が達成されたか。)

スピーチをする上で最も重要なのは、話し手の目的が聞き手に伝わったかどうかである。それを測るために、まず話し手にどのような目的で話すのかを事前に調査する。そして、スピーチを聞き終わった後、聞き手がどのように感じたのかを調査する。そして、話し手の目的と聞き手が感じたことが一致しているかどうかを測る。

6. まとめと今後の課題

パブリックスピーキングの能力は、「自分の考えや思いを、聞き手に的確に伝える能力」と定義される。このことについて、教師および学習者が共通認識を持てるように、今回、評価項目の作成を試みた。

今回、4つの評価項目を立てたが、このままでは学習者に、「なぜ印象が悪かったのか」「なぜ伝えたいことが伝わらなかったのか」をフィードバックすることができない。そのため、実際に使用する評価表は、評価が悪かった要因を評価者に挙げてもらえるような欄をつけたものにしたい。また、今回評価項目を作成したが、まだ実践で使用していないので、使用した上で、よりよいものにしていきたい。

参考文献

蔭山洋一(2011)『パブリックスピーキング』NTT出版

井上義夫・金子眞喜(2000)「パブリック・スピーキング」のための話しことばの自己点検と分析について『研究紀要』(1)p209-219 関西国際大学

中西雅之(1991)「スピーチ・コミュニケーションの英語教育への示唆(Ⅱ):パブリック・スピーキング」『共立女子大学文芸学部紀要』(37),p11-24 共立女子大学

野村和宏(2004)「Be Prepared to Speak—A Step-by-Step Video Guide to Public Speakingにみるパブリックスピーキング論」『神戸外大論叢』55(3),p27-46 神戸市外国語大学研究会